

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520282

研究課題名（和文）

北ヨーロッパにおける〈愛〉の寓意の変容と衰退—中世末から近世へ—

研究課題名（英文）

The Transformation and Decline of the Allegory of Love from the 15th to 17th century Europe

研究代表者

前野 みち子 (MAENO MICHIKO)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：40157152

研究成果の概要（和文）：本研究は、中世において恋愛と奢侈とモラルの結節点となった悪徳の寓意〈ルクスリア〉が、中世的寓意思考に大きな影響を与えた『プシコマキア』の挿絵入り写本を介して文学、教会彫刻、説教などに流れ込み、十二・三世紀の商業都市の興隆を背景に市民への戒めや芸術創造の動機として機能したことを明らかにするとともに、この現象が同時代の恋愛と奢侈を代表していた宮廷文化とどのように関わり、どのようにその関係を変容させていったのかについて考察した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to throw some light upon the personified allegory “Luxuria”, an attractive woman of Vice, which is one of the Seven Deadly Sins and aroused a variety of interests as a pivot of Love, Luxury and Christian Morals in European Middle Ages. Based upon historical documents, especially upon many illustrated manuscripts of Prudentius’ *Psychomachia* between the 9th and 11th centuries, I consider and analyze the religious and secular thoughts on LUXURIA in both cultural contexts of the court and the rising commercial cities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：ヨーロッパ中・近世文化史

科研費の分科・細目：比較文学

キーワード：〈愛〉の寓意、ルクスリア、奢侈文化、宮廷文化、都市文化、キリスト教モラル

1. 研究開始当初の背景

本研究は当初、それまで九年にわたり科研費によって行った三つの研究成果を踏まえて、中世末の宮廷風恋愛詩の系譜や民衆的恋愛詩（バラッド）、民衆文学において、中世の寓意伝統を引くステレオタイプによって憧れと共に捉えられていた〈愛〉が、十六世紀に入るとその定型的枠組を次第に解体し、時

代のリアリティの断片を取り込んで自覚的に新奇さを追求しはじめることに注目し、この現象が同時代の都市の状況やキリスト教改革とどのように関わり、中世的な〈愛〉の寓意を変容させる原因となったのかを考察しようとした。同時代のヨーロッパにおいて、〈愛〉をめぐる寓意はあらゆる文化的営みを刺激する創造的イメージの中核を形成

するほど重要な位置を占めていると考えたからである。

2. 研究の目的

中世において定型化した〈愛〉をめぐる寓意的思考とその表現が、中世末から近世にかけての北西ヨーロッパでどのように変容し、十七世紀半ばになってなぜ急速に衰微したのかという問題を、商業的繁栄を誇ったネーデルラントやドイツの都市社会の構造転換、市民たちの価値観や宗教的心性の変容と関連づけて分析・解明する。宗教改革運動の萌芽期と重なる風刺文学の隆盛、その進行と浸透にともなって生じた核家族的モラルの前景化が、伝統的な〈愛〉の寓意文学の中心に位置する性愛中心的なウェヌス・アモル神の間に亀裂を生み、その分離を促して後者が新たな寓意的〈愛〉を代表するに至る経緯を、文化史的に記述することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 中世末の北西ヨーロッパ都市文学における〈愛〉の寓意のトポス及びステレオタイプ表現の収集、及びそのルーツからの変容過程の分析。

(2) 中世末から十六世紀半ば過ぎまでの都市文学や図像に登場する〈愛〉の寓意の分析。とりわけ、この時期から顕著になる〈愛〉の代表的表象がウェヌスからアモルへと交替する現象に注目し、宮廷風の〈愛〉とルネサンス・人文主義な〈愛〉の差異を分析。

(3) 十七世紀オランダで数多く出版された〈愛〉の寓意図像集の特色とその社会背景の記述。カトリック圏ネーデルラント、フランスの寓意図像集との比較・分析。

以上の三段階的研究を進めるために、以下の四つの観点を重視する。

① 〈愛〉をめぐる寓意的言説及びイメージの焦点として、ウェヌス像とアモル像の変容・変貌に注目する。

② 十七世紀まで〈愛〉をめぐる寓意的言説の規範であったオウィディウスのテキストとその模倣・引用・断片化・改変、そして図像イメージへの転化に注目する。

③ 〈愛〉をめぐる寓意のトポスとステレオタイプの典型である身体各部位の独立・断片・寸断化・列挙（羅列）、心身の分離・乖離などを示すテキストと図像に注目する。

④ 都市民と宮廷人、都市民と知識人、新教と宗教の二項対立現象に注目する。

4. 研究成果

本研究の基礎作業はまず、中世末の〈愛〉をめぐる寓意のルーツを確認することから始

めた。周知のとおり、十二・三世紀の擬人化アレゴリー文学は、プルデンティウスの『ブシコマキア』（五世紀始めに成立）から大きな影響を受けたとされる。また中世的な〈愛〉をめぐる言説には、オウィディウスの著作、とくにエレギア（ローマ風恋愛詩）や『恋の技法』などの詩句との関連も顕著である。このようなローマ古典及び初期キリスト教ラテン語文学からの影響関係の研究は、文学史的枠組においてはすでに飽和状態に達した観がある。本研究は、そうした成果を参照しつつ、〈愛〉をめぐる寓意文学的言説と中世の二項的社会構造（宮廷と都市）との基底的关系を読み解き、中世的商業都市の興隆にもなって、〈愛〉が奢侈文化の代表的表象としてキリスト教モラルの発する批判の矢面に立つようになるプロセスを、図像資料を併用して分析・記述した。本研究は中世末の〈愛〉の寓意に含まれる意味を問うことから始めたため、当初の予定を変更して大幅に時代を遡ることになった。

(1) 〈愛〉をめぐる中世寓意文学の宮廷—都市の二項的背景

『薔薇物語』において、〈愛〉（＝薔薇）を求める「わたし」と言葉を交わす寓意的人物の主張は、ロリス作とされる前篇とマン作の後篇で、同じ概念名詞を自称しながらかなり異なっている。話の中心を占める性愛と奢侈をめぐる論議は、前者では所有に基づく宮廷的閑暇の楽しむ優雅な遊び（例えば音楽とダンス）と結びついているが、後者では勤労に基づく都市的商業的な交換・流通・金銭のイメージと緊密に関わっており、同時代の『カルミナ・プラーナ』に歌われるようなウェヌスの寺（娼館）とその娘たちの代表する娼婦文化に規定されている。また、マンが俗語に訳したことで知られる十二世紀のアベラールとエロイズのラテン語往復書簡においても、パリ生まれのエロイズは当時の女性の代表的立場として妻と妾（娼婦）の二項概念を持ち出している。これは、トゥルバドゥールのタンソン（論争詩）が、宮廷風恋愛の法廷で貴婦人にとって義務に拘束される「妻」と自身の意思にしたがって生きる自由な「恋人」の二者択一を問うのとは異なり、経済的基盤をもたない市民女性が自立した「恋人」として〈愛〉と関わる可能性が存在しなかったことを示唆している。都市的な〈愛〉は流通や金銭と切り離して考えることができないという点で、宮廷的〈愛〉と明確な一線を画していた。同様に、十二世紀のカペラヌスの『宮廷風恋愛の技術』にも、貴族・宮廷に對抗する商人の自己主張と恋愛志向（＝上昇欲求）が風刺を込めて語られている。マンが語る『薔薇物語』後半の〈愛〉を司るウェヌスとアモルは、本来的にモラルに顧慮するこ

とのない前篇の宮廷的優雅や気品のもとを去って、宮廷的洗練を模倣する、野心的だがいまだに粗野な都市商人階級を恋愛行動へと駆り立て、新興階級のモラルと〈愛〉との内的葛藤を嘲弄しているように見える。実際、繁栄へ向かって加速度を付け始めたこの時期の商業都市では、恋愛は宮廷風を模した娼館での商人たちの遊蕩と同義のものとなってゆく。マンが描いた『薔薇物語』後篇の世界は、キリスト教モラルがステンドグラスに放蕩息子の寓話を描いて宮廷風を装う奢侈文化を繰り返し戒める十三世紀、『アラスのクルトワ』のような演劇が奢侈をめぐって騙す市民と騙される市民を風刺する十三世紀がまさに終わろうとする時代を反照していたと言えらる。

(2) 恋愛と奢侈とモラル——古典世界から中世へ

当初は(1)での分析結果をもとに、中世末から近世へ向けて商業都市の構造転換がもたらした〈愛〉の寓意の変容過程を辿る予定であった。しかし、恋愛と奢侈の都市的複合現象を分析するに際しては、そこに介在するキリスト教モラルの力を無視することができない。この関連で『プシコマキア』の分析は不可欠と考え、研究計画に反して時代を遡ることにした。さらに、プルデンティウスがローマ文学と修辞に通じ、彼のテキストはその強い影響下にあったことを念頭において、キリスト教化以前には恋愛と奢侈がどのように関係づけられていたか、またウェヌスとアモルが本来の異教的テキスト中で、これら二つの要素にどのように関与していたかについて、エレギア（主にティブッルス、プロペルティウス）を素材として分析した後、それらの要素が、中世寓意文学を席捲した『プシコマキア』にいかに関与しているかを比較・検討した。なぜなら、この作品は中世以降十七世紀に至るまで市民的モラル表象の中核を占めた〈七つの大罪〉の淵源であり、その一つ〈ルクスリア〉には明らかに、都市における恋愛と奢侈の融合したイメージが認められるからである。

その結果、以下の結論が得られた。

① エレギアにおける詩人の恋人は「乙女」*puella* と呼ばれる高級娼婦的な女たちであったと見られており、基本的には金銭の絡む性愛の対象である。しかし、貧しいのを常とする詩人との関係においては無償の恋愛が成立する余地が残っており、それがエレギアの世界に一種の緊張を与えることもある。とはいえ、恋人の貪欲に対する非難はエレギアの定型であり、恋愛は奢侈と不即不離の関係にあると認識されている。さらに、奢侈のイメージは交易（商業）と結びつき、恋愛その

ものの奢侈品（金銭）交換可能性を暗示してもいる。

② 初期キリスト教文学である『プシコマキア』は、性愛一般を娼婦の姿をとった一義的な〈情欲〉*Libido* として〈貞潔／純潔〉と対決させる。その一方で、エレギア的な恋愛は奢侈との結びつきを継承し、〈節制〉と対峙する〈ルクスリア〉像に変容している。彼女は快楽を象徴する蠱惑的な女として擬人化され、物憂げに酒席について贅沢のかぎりを尽くしている。彼女はまた、妓楼や居酒屋の女将に喩えられ、そこに待る酔った踊り子とも言い換えられる。性愛はほめかされているものの、〈ルクスリア〉は贅沢がもたらす洗練のヴェールを身につけており、裸の〈情欲〉とは一線を画していることが分かる。また、異教神アモルが〈ルクスリア〉の取り巻きの一人として登場するのに対し、ウェヌス（性愛）は言及されず、ウェヌスタス（魅惑）に姿を変えていることも、同じ意味方向を示している。

つまりプルデンティウスは、情欲と快楽とともに悪徳としながら、その間に存在する文化的洗練の差異を識別している。

(3) 『プシコマキア』写本挿絵のルクスリア像の分析

現存する九世紀から十二世紀まで（十・十一世紀制作のものが圧倒的に多い）の『プシコマキア』写本の二系統の挿絵を、R. Stettinerの刊行した網羅的な資料、*Die illustrierten Prudentiushandschriften, Textband* (1895) と *Tafelband* (1905) のとくにルクスリア像に注目して検討し、テキストと対照させながら分析した。分析の主要な観点は、美術史的な様式の差異ではなく、両系統がテキストのどのような部分に焦点を当てて図像化しているかである。両系統の細密画家（写字生と同一人物の場合もある）の異なる関心のありよう、また同系統と見られる写本の挿絵が示している偏差や創意について、ワールブルクの方法を援用して比較・分析し、いくつかの新たな知見を呈示した。

① パリーアングロサクソン系統の挿絵に描かれたルクスリア像には、この悪徳を古代的異教世界の書割に位置づけるのではなく、写本制作と同時代の悪徳として、同時代的背景において描こうとする姿勢が明白である。この系統の挿絵は、テキストの語る順序にそった場面展開から逸脱し、テキスト冒頭で一人酒宴を張るルクスリアの姿を消し去って、はじめから隠喩妓楼あるいは居酒屋の女将としてのルクスリアを描いている。また、おそらくはこの写本が制作された同時代の人々に直接語りかけ、その悪徳の克服を説こうとする意図から、彼女の衣装も他の登場人物と

同様にテキストの描写とは異なる中世都市風である。酒を注ぐ侍童たちは宮廷風で、奢侈のモデルが都市人の憧れる宮廷にあることを示唆している。

② この系統のもう一つの大きな特徴は、テキストが隠喩として述べるルクスリア像、すなわち酒席を楽しませる踊り子とその伴奏者たちの姿を生き生きと描いていることである。踊り子は異教的な激しい身ぶりで踊っており、その伴奏には古代ギリシアを中心とする地中海文化圏で祭祀にも一般酒席にも不可欠であったアウロス吹きが登場している。この楽器は異教的狂信・陶酔に伴うことを常としたためにキリスト教によって忌み嫌われ、中世西ヨーロッパ世界から姿を消した。このことを考えるならば、踊り子ルクスリアと伴奏者の異教的な姿は、悪徳それ自体の異教性を強調するための手段であり、それと同時に、ダンス・音楽・売春の巣くう悪所としての居酒屋、娼家（娼館）が奢侈文化を代表するイメージとして中世の早い時期から定着していたことが窺える。

(4) ルクスリア像の変容

十二世紀になると、『プシコマキア』の美德と悪徳の戦いは公開の道徳訓として多くの教会建築に刻まれるようになる。

① ロマネスク教会扉口のアーチ型浮彫では、すべての美德がペアとなる悪徳を踏みつける一律の姿で刻まれており、個々の美德と悪徳を同定する図像的な差異は見いだせない。その代わり、像の外辺にこれらのペアをなす美德と悪徳の名前が彫られている（この刻まれた名前資料としては、主に A. Katzenellenbogen, *Allegories of the Virtues and Vice in Mediaeval Art*, 1939 を使用）。そしてそこに示された善悪の対立概念は、とりわけ〈ルクスリア〉をめぐる、奇妙な混同・混淆を生じていることが分かる。つまり、プルデンティウスのテキストでははっきりと異なる悪徳とされていた〈情欲〉と〈ルクスリア〉の境界が曖昧になり、どちらかに一本化されたり、あるいはそれらと本来的に対をなしていた美德〈純潔〉と〈節制〉が〈純潔〉のほうに一本化されたりという現象が見られるのである。こうした変化の理由を、例えば E・マールのように、アーチ型の頂点で美德－悪徳の対が出会うシンメトリーを構成するには、本来的に七つの対を六あるいは八の偶数にする必要があったという造形上の問題だけに求めることは難しい。この混同は、十三世紀において〈ルクスリア〉が一義的に「色欲」と解釈されるようになる意味方向の変化を促したものであり、(1)～(3) で得られた研究成果に通底する商業都市の興

隆・繁栄と緊密に関係した意味推移と考えられる。

② 〈ルクスリア〉の悪徳が「色欲」として一義化していく過程は、同時代の教会建築の柱頭などに刻まれた〈ルクスリア〉像にも如実に見られる。それは〈七つの大罪〉とひとまず切り離された文脈で、独立した像として登場することも多く、しばしば悪魔を伴って、性愛の醜悪さを蛇や蛙など地下（地獄）を象徴する生き物と共に表現されている。その姿は、この後、十四世紀末に〈メメント・モリ〉のモットーと共に西ヨーロッパ全土に普及する醜悪な屍体像を彷彿とさせ、その本来的な語義、「奢侈」からかけ離れたおぞましいさを晒している。中世キリスト教の極端な性愛嫌悪が、〈ルクスリア〉をアダムの誘惑者イヴのイメージとの重合に導き、地上の享樂すべてを代表・表象していた彼女を、原罪の誘惑者として断罪する。奢侈文化の華やかで魅力的な面貌の陰に潜む悪魔という二重性は、後に定着していくファミ・ファタール像のルーツでもあるが、十二世紀にはすべての虚飾を排してひたすら醜悪な面のみを強調する粗野で過激な表現を生んでいたことを指摘した。

③ ①に言及したように、教会扉口アーチ型浮彫の『プシコマキア』モチーフにおいては、美德と悪徳の対はすべて同様の形姿を示している。その特徴をなすのが、悪徳を踏みつけてその上に立つ美德の姿である。このような造型が古代東方の絶対的権力を表す図像にルーツをもつことは既に指摘されているが (Katzenellenbogen, *ibid.*; B. Schweitzer, *DEA NEMESIS REGINA*, 1931)、本研究は、それが十二世紀ロマネスク建築のモチーフに流れ込むに当たって、前世紀まで盛んに制作されたカロリング朝－ランス系統の写本 (3) で言及した二系統の写本挿絵のうちの別系統) の挿絵が中継的役割を果たした可能性を示した。この系統では、〈偶像崇拜〉に対するキリスト教〈信仰〉の勝利を描く場面を中心に、悪徳を踏みつけてその上に立つ図像が見えている。一般にテキストに忠実な挿絵を施す傾向にあるのがこの系統の写本の特徴と言えるが、ここでは闘技場的な戦闘を経た後に得られた勝利の凱歌が、テキストから更に踏み込んだかたちで誇示されており、キリスト教〈信仰〉の理念が、異教的〈偶像崇拜〉に対する美德の専制的な勝利として表現されたところに、当時のキリスト教精神の自己認識を見てとることができる。

(5) Hortus Deliciarum の〈美德の階段〉

十二世紀末の女子修道院長 Herrad が残した資料として名高いこの百科全書の書物は、当時の修道院の墮落した状況を改革しようと

する立場から編集された。ここには『ブシコマキア』の抜き書きと挿絵が含まれているが、その直後に、〈七つの大罪〉と関連させて、当時のキリスト者にとってのさまざまな誘惑を示唆した一枚物の図像が挿入されている。その図像に描かれた〈信仰〉から離脱する個々の墮落についてのラテン語説明文を翻訳した上で分析し、この時代の〈ルクスリア〉への欲求が聖職者と教会をも巻き込んで高まっていたことを明らかにした。

これらの研究成果は、まだ発表していないものもあるが、平成24年度から科研費を受けて開始した継続課題「〈放蕩息子〉の寓話と北ヨーロッパ商業都市の変容——中世から近世へ——」の研究に連続させて論文として発表するつもりである。

なお本研究は、筆者が19年度末から20年度に患った眼病と手術、予後の回復の遅滞により、四年間の研究期間中一年余の短縮を迫られたことを付記しておく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 前野みち子、ウエヌスとアモルの変容—恋愛と贅沢とモラルをめぐる考察Ⅰ—、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、査読無、第XXXI巻、第2号、2010、pp. 27-46.
<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/31-2/maeno.pdf>
- ② 前野みち子、ウエヌスとアモルの変容—恋愛と贅沢とモラルをめぐる考察Ⅱ—、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、査読無、第XXXIII巻、第1号、2011、pp. 1-19.
<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/proj/genbunronshu/33-1/maeno.pdf>

[その他]

ホームページ等

http://profs.provost.nagoya-u.ac.jp/view/html/100003337_ja.html

6. 研究組織

(1)研究代表者

前野 みち子 (MAENO MICHIKO)
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・教授
研究者番号：40157152

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし